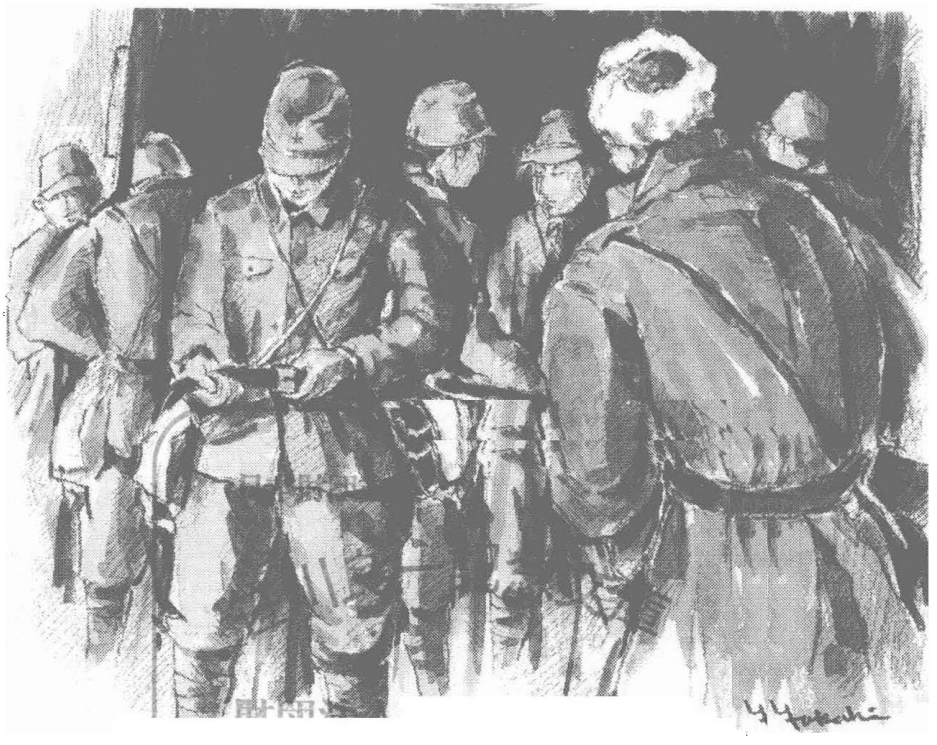
死の谷アングレン抑留記

このベルトと共に

河口　昇

●このベルトと共に●

文　河口　　昇
絵　横地 達雄



横地達雄氏　画

◉ このベルトと共に ◉

まえがき

私は、今大切な宝物を二つ持っている。

その一つは、私が東京の学校を卒業して満州の航空会社に赴任するにあたり、今は亡き母が作ってくれた絣の着物である。

長男と次男を戦地に送り、続いて三男の私と別れねばならなかった母の想いのこもった着物で、戦災を免れて今手許にある。

今一つは、終戦直後「鞍山に集結せよ」というソ連軍の命により、遼陽飛行場から軍用トラックに乗り込む直前、営庭で支給された頑丈で不細工な革ベルトである。二年近いウズベック共和国での強制労働に耐え、昭和二十二年八月病院船高砂丸で舞鶴港に帰還し、体重わずか三十八キロの体で自宅玄関を這い上がるまで、一日も離れず私の腰に巻きついていた革ベルトである。

私はこのベルトとともに過ごしたアングレン収容所の抑留記録を若い世代の方々にも読み易くまとめて出版し、強制労働の犠牲となって故国で待ち侘びる家族を偲びつつ若い命を凍土に埋もれた遺骨となったまま半世紀を過ごされておられる同胞六万余名の鎮魂譜として捧げ、私自身の戦後を閉じたいのである。

そのため、教職を退職後の四か年間、多くの抑留記録を通読するとともに、全国の戦友を訪ねたり、資料の収集に専念したりして想を練った。

まず終戦、続いてソ連軍の満州全土に進駐という大きな歴史上の荒波に巻き込まれ、すべての自由を失ったなかで故国帰還という幽かな希望を抱いて、若き将兵が手をつないで精いっぱい生き抜いた青春の叫び声をお聞きいただきたい。

そのため私と同じ列車で抑留され、同じ収容所で苦労を共にされた山路浩氏（長崎市）の軽妙な記録文を随所に取り入れさせていただき内容の充実を図った。

一方、同一部隊に所属しながら私とは異なった数奇な道を歩まれ、かろうじて生還された青年将校の手記、抑留列車から飛び下りた一兵卒の脱走記録や将校である夫を抑留または拉致されながらも、幼児とともに暴力の巷で生き抜いた夫人の手記など、敗戦という大波に巻き込まれた当時の状況をより広い角度から具体的にお伝えする。

終わりに、戦争体験のない方々に一人でも多く読んでいただきたいとの願望から、理屈抜きで気楽に読み通すことのできる内容とすることに重点をおくとともに、挿し絵をふんだんに載せた型破りの抑留記の編集を思い立ったのである。

そのため相手の迷惑をも顧みず、掛川市在住の画家横地達雄氏に再三にわたって懇請し、そのご厚情のもとに躍動感溢れる挿し絵が表紙および誌面を飾っていただけたことに対し、また、貴重な手記を提供くださった方々にも感謝のほかなく、心よりお礼を申し上げる次第である。

平成十一年三月一日

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

まえがき……2
第一章　遼陽飛行場大隊入隊……7
第二章　鞍山に集結せよ……17
一、武装解除・18　二、ひでえ疲れだ・21　三、見えない敵と空鉄砲・25
四、製鉄所の解体命令・28　五、私を信じてくれ・31　六、鞍山駅頭の別れ・35
第三章　遼陽脱出――隊付軍医夫人の手記――……41
一、まさか日本が・42　二、あっという間の後ろ姿・44　三、鉄心寮の大晦日・48
四、コロ島へ・51
第四章　暴力の坩堝鞍山の在留邦人……53
一、密やかな見送り人・54　二、富士小学校の床下・60　三、暴徒の群れ・63
四、北満開拓団からの避難民・66　五、立ち向かう女性たち・69
第五章　抑留列車、地の果てを行く……71
一、トイレ・72　二、黒パン受領・74　三、脱走兵全員射殺・78
四、バイカル湖・82　五、入浴・84　六、雲上に飛び下りる・85
第六章　パミールの果てのアングレン収容所……89
一、死の谷の収容所・91　二、ブリガード升原・96　三、死の抗議・99
四、山羊中尉・101　五、ノルマ・104　六、欠食の年の瀬・108　七、脱走・114

八、バザー・オーテーエス・116　九、ヘソから肛門までのセメント卸し・120
十、大型工作機械の荷卸し作業・122　十一、倉庫番サフォーノフの笑顔・125
十二、草原の春・127　十三、真夏の夢、泥煉瓦づくり・130
十四、アングレンの吸血鬼・137　十五、嬌声労働・140
十六、ウズベック部落にて・143　十七、瘭疽とGペン・146　十八、バカポンプ・150
十九、ウォットカー醸成場・155　二十、切れた電球・160
二十一、無惨、加賀少尉事故死す・168　二十二、虜囚劇団のはしり・171
二十三、青春を燃やす炭坑・177　二十四、悪霊の谷の炊事場勤務・184
二十五、ハラショーラボーター・188

第七章　カガントン野戦病院にて……191
一、カガントン野戦病院入院・192　二、深夜の怪音・197
三、ソ連軍高級将校の視察・200　四、『東京音頭』・201　五、患者の選別・204
六、四人だけのダモイ・208　七、ナホトカ港・210

第八章　本文と関連の深い体験記録……219
その一、北満の原野に飛び下りた一兵卒　青木藤一……220
一、脱走・220　二、白馬に乗った中国老人・223　三、「おい、ジャングイ」・224
四、室町小学校・226　五、熱病と一升ビンの水・227
六、北満からの少年と少女の死・230　七、日本人難民の行列・231
八、引き揚げ列車・232　九、自宅の敷居をまたぐ・232

その二、〝ダモイ　オミット〟　武田庄三郎……234

一、ダモイが始まる・234　二、たった一人のダモイオミット・236　三、虜囚の涙・240
四、タシケント収容所に移る・242　五、ダモイの歌・243　六、生きている喜び・245

その三、青年将校二人、混乱の巷に潜行する　田村十三日……247

一、遼陽から鞍山へ・247　二、ソ連へ連行・247　三、荒れ果てた富士小学校・249
四、部隊が去った後の市街・250　五、鞍山での生活・251　六、懐かしの遼陽へ・253
七、帰り着いた遼陽・254　八、同胞の情・257　九、黄金餅・258
十、八路軍の使役・259　十一、男装・260　十二、屋台〝弁慶〟・260
十三、八路軍に逮捕される・262　十四、引き揚げ・264　十五、祖国への第一歩・267

その四、麻疹の猛菌、日本で蘇る　河口　昇……270

本書に寄せて……273

元大隊長　伊藤　緑氏・274　元軍医　作　正彦氏・275
元小隊長夫人　升原尚子氏・276　元戦友　山路　浩氏・279
挿し絵について　横地達雄氏・281

あとがき……283

参考文献……287

著書略歴……288

第一章　遼陽飛行場大隊入隊

腹の底からしぼり出すような小気味のよい引率下士官の号令が飛び交う。

昭和二十年八月、炎天下を関東軍第九十七飛行場大隊所属の各隊が続々と兵舎横の広場に集合した。飛行場大隊は、それを機能させるために次の四ヶ中隊で構成されていた。

○本部中隊――無線、暗号、有線、気象、写真の各班と本部要員

○警備中隊――飛行場の警備（対空戦闘を含む）

○補給中隊――燃料・弾薬等のトラック輸送

○整備中隊――航空機の整備

私の所属する本部中隊も隊列の中央部に整列した。背丈ほどに生い茂った夏草がこの広場をとり囲み、舞い上がった埃にまみれる。ぎらつく陽光で眼が痛い。

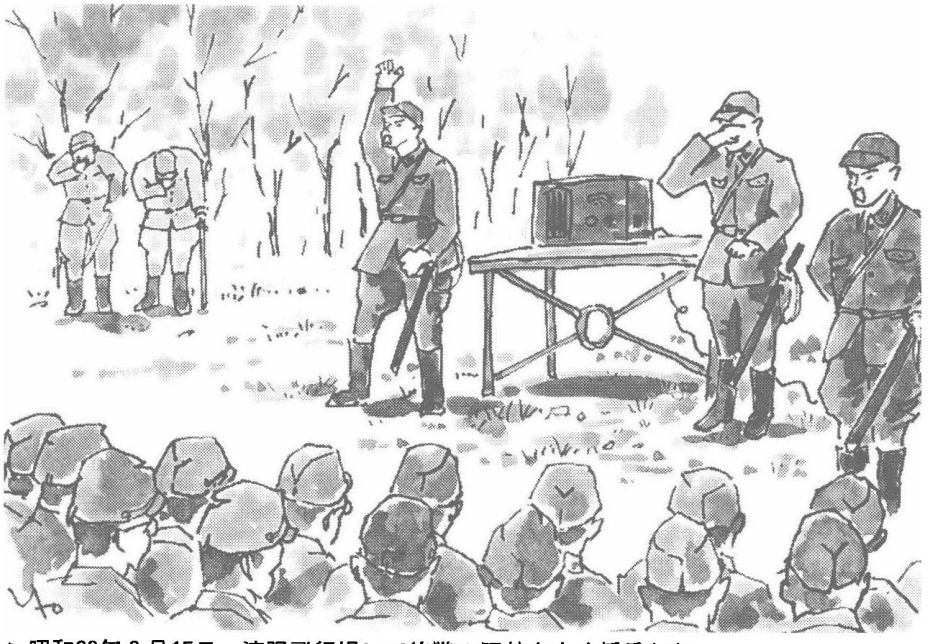
日露戦争の古戦場、橘山、首山を東方三キロに望むここ遼陽郊外に昨年六月に北満嫩江から移動してきた本飛行場大隊の任務は、約二十キロ南にある東洋一といわれた製鉄の街、鞍山を始め奉天、遼陽一帯の重要工業施設をB29の大編隊空襲から防衛するにあった。

当時、満洲における航空部隊の大半が比島方面に裂かれていたので、本飛行部隊は当時の関東軍の虎の子のような存在であった。

地平線の果てまで続く一面の高粱畑の真っただ中に、木造兵舎が数棟と木造格納庫が二棟、草原中の二千メートル滑走路には銀翼の戦闘機が真夏のぎらぎらとした陽射しを浴びていた。

私はこの年、昭和二十年三月まで満州航空株式会社の社員として奉天飛行場に勤務し、旅客機の機上通信士の卵であった。この四月に現地入隊兵として、ここ遼陽の飛行場大隊で幹部候補生となった。すでに一期の教育訓練を終え、いわゆる幹候生としての座金付きながら真新しい三つの星の襟章を付けていた。

突然の命令による大隊全員の集合整列が終わる



▶昭和20年８月15日　遼陽飛行場にて終戦の詔勅をきく将兵たち

と、一瞬の静けさがあった。

首筋から汗が吹き出る。

「いつもと違う、なんだろう」と、私は緊張した。と、隊列の前方に二、三名の兵が走ってきて、指揮台上へ木製のラジオキャビネットを置くと何か調整をして、すぐ延長コードを伸ばしながら立ち去った。炎天下に整列をした大隊全員の前にちょこんと置かれたこの家庭用ラジオは、事情をまったく知らない私にはまことに奇異に感ぜられた。

「故国日本より重大な放送がある」

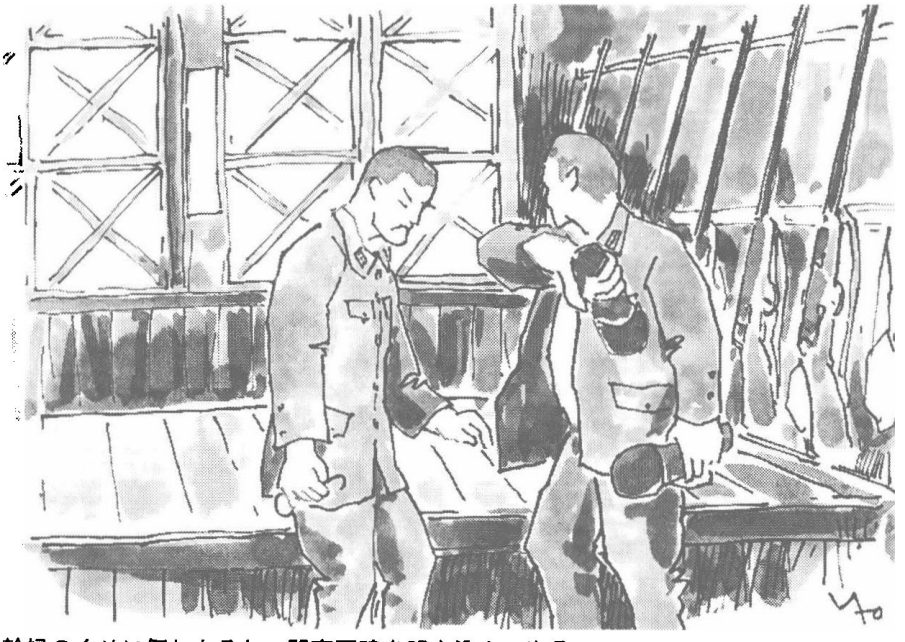
週番将校がつぶやくように告げた。我々は不動の姿勢で待った。その耳に異様な曲と雑音とが、大きく小さくうねりのように響いた。

カリッ、カリッという空電の音に妨げられて放送する言葉の粒が分からない。天皇陛下のお言葉のようだが、キャビネットが震えて雑音のみが響く。

やがて放送は終了しスイッチが切られた。誰一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人号令をかける者もなく、指揮を取る者もいない。
前方の指揮台の両側に並んでいた将校が、突然大声を発して拳を高く上げたり、拳で涙をぬぐったりしている。初年兵の私は放送内容は聴き取れなかったが、「戦争に負けたんだな」と理解した。
その時の自分の気持ちをはっきりと言い表すことはできないが、「なにかが終わったのだ」と緊張の糸が次第にほぐれていくのを全身で感じた。
その日の、その後のことは覚えがない。
空白の半日である。
当時満二十歳、私が遼陽の地で体験した、昭和二十年八月十五日の追憶である。
「何かが終わった」とは私の素直な感じをいったのだが、この場にいたすべての兵隊に共通した思いではなかったかと思う。家を捨て、家族と別れ、また青春時代のすべてを措いてこの地にいる。そして立場の違いはあっても、今を精いっぱいに生きてきた。そして今、その目標が崩れ去ったのだ。
想えば、私はここに入隊して約四か月半、連日の厳しい訓練に緊張のたがのゆるむ日はなかった。
入隊直後の内務班生活における古参兵の厳しい焼き入れに始まり、寝入りばなの非常呼集「ガス！」の怒声に叩き起こされ、ガスマスクをつけて窒息しそうな飛行場の駆け足訓練。
ある日、空腹に耐えかねて同年兵と一緒に残飯をぱくついてぶん殴られ、情けなさでクシャクシャになった顔をして、初年兵だけで食罐返納に炊事場に出掛けた時に、「かわいい奴らだ」と笑われたこと。
B29の鞍山空爆が伝えられたころ、我々は特殊訓練に入っていた。それは対戦車肉薄攻撃の訓練で、細長い竹棒の先端に葬式饅頭状の携帯爆雷をつけて、その棒の根元を握り、バランスを取りながら草陰から飛び出し、敵戦車のキャタピラの直前にタイミングよく爆雷を置く。と同時に、体は驀進してくる敵戦車の側面の草陰に伏せるという



▶幹候のくせに何しとるか。関東軍魂を叩き込んでやる

九死一生の訓練であった。

この時、私は教官から珍しく褒められ、「貴様の手本をみんなに見せてやれ」と言われ、竿先で大きく揺れる疑似爆雷を片手に、何回も何回も宙を舞わされた時の草いきれが、今さらのように思い浮かぶ。

また、ある夜、点呼の直後、細長く暗い内務班で、古参戦友の床をとっていた私は、不意に別の古参兵から呼び出されて内務班の中央に立った。

突然、嵐のような大声で怒鳴られた。

「貴様は幹候のくせに、自習室で同年兵がタバコを吸っているのを、なぜ注意できんか」

私には寝耳に水の出来事だが、一瞬覚悟をきめた。つづいて、

「関東軍魂を叩き込んでやる。眼鏡をとって奥歯を食いしばれ。足を踏んばれ！」

と言い終わるやいなや、上靴（革製の軍用スリッパ）を両手に握った古参兵の往復ビンタの洗礼を

受けた。
左右に飛ばされそうになるのを必死にこらえ、口の中に温かい血のりが流れるのを感じながら、それでも手に握った眼鏡だけは落とさぬようにしっかり握っていた。
翌朝、朝食の熱いみそ汁がピリッと沁みて、さすがに口にすることはできなかった。
後日思うに、左右の頬をたて続けに殴られたためか、それほどの痛みは感じなかった。また、目や耳の部分には一発も当たっていない。恐らくこの鬼の古参兵は、眼をつむった私の顔を、いや左右両頬をしっかりと見すえて、両腕に握った靴底の平らな部分が、柔らかな頬の中央部分に左右バランスよく当たるように留意して殴ってくれたのではないかと思う。これも百戦錬磨の古参兵ならではの思いやりであろうか。
内務班生活にも少し馴れてきた初夏の晩に、開隊記念日を祝う本部中隊の酒宴の席が内務班の中でもたれた。細長い食台を内務班通路に二列向かい合わせて何台も並べ、中隊付きの将校数名を上座に招いた。開会の言葉に立ったある将校が、「今晩は無礼講であるから将校も下士官も初年兵もない。思う存分にやれ」と。
酒がひととおりまわったころ、班長が立ち上がって、「お許しが出たぞ。初年兵もなにかやれ。」と催促をする。久しぶりの酒肴で、ほどよく酔いのまわった単細胞頭の私は、いきなりいちばん下座のテーブルの上に飛び上がり、わけの分からぬ歌をがむしゃらに歌いながら上座に向かって、踊るような身振りで料理の並ぶ狭いテーブル上を歩き出した。
突然のことに、近くにいた同年兵や若い兵隊は慌てて食器などを両側にのけて通路をあけてくれる。下士官の机の近くに来ると酒肴を盛ったアルミ食器が、足踏みに合わせてガチャガチャと鳴る。伴奏付きの気分で上座まで踊ってきた私は、さす

▶大隊記念日の夕方、本部中隊の無礼講

がに躊躇した。

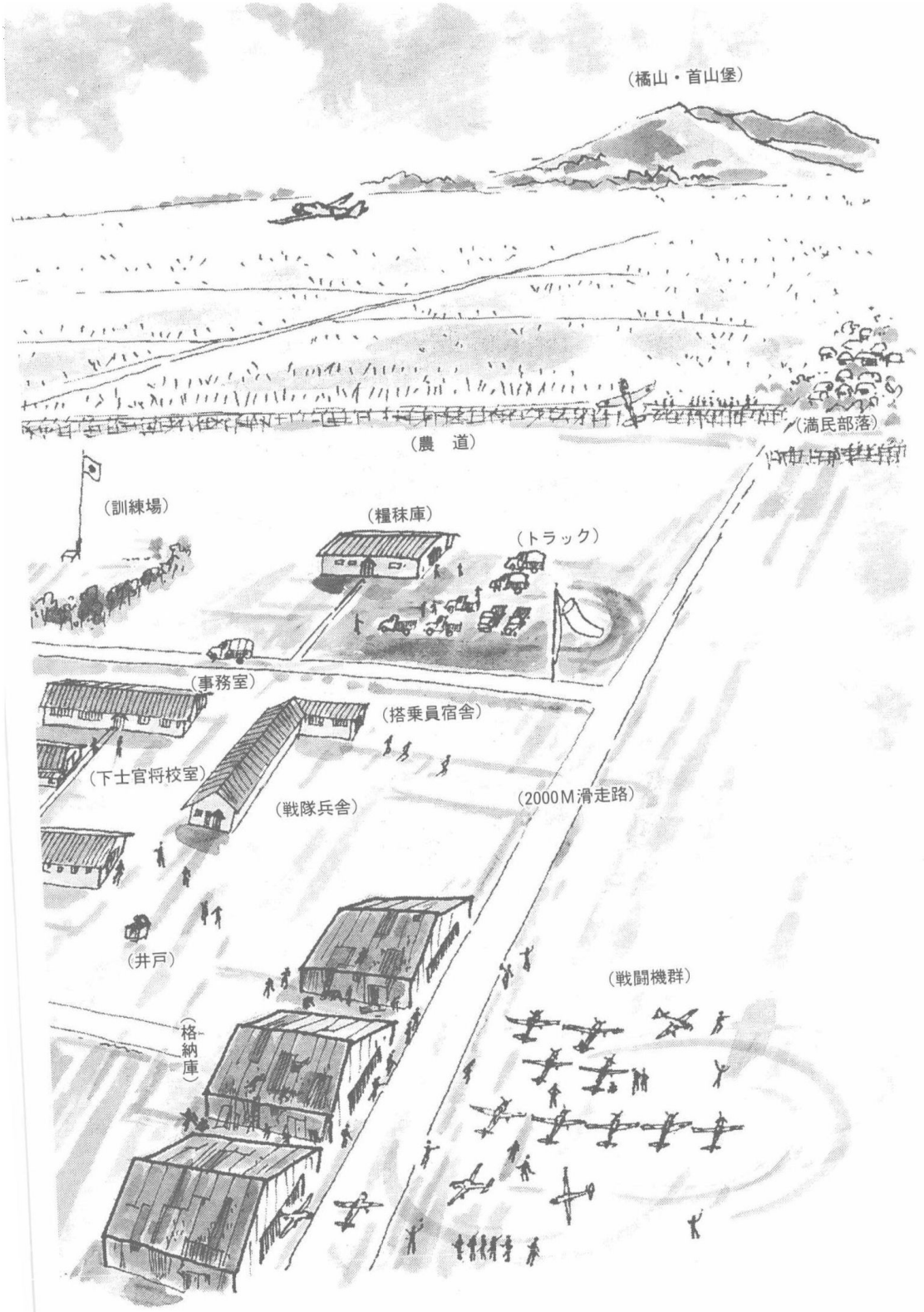
平素は口もきけない中隊付きの将校の顔が真下から私を見上げている。とある兵長が、すっと私の足許によってきた。私の足を軽く叩きながら、「よかったぞ。よかったぞ。もういいから降りろよ」と、なだめるようにして土間に降ろしてくれた。私は意識の手綱が、急にゆるんでいくのを感じた。

ふと気づくと、私は兵舎横の草の生えた盛り土の上に仰向けに寝かされていた。夜風が心地良い。「しまった。点呼は？」と顔色を失った。ちょうどその時、私の戦友となっていた古参の一等兵がやってきて、

「心配するな。気分が悪くなって、医務室へ行ったことになっている」

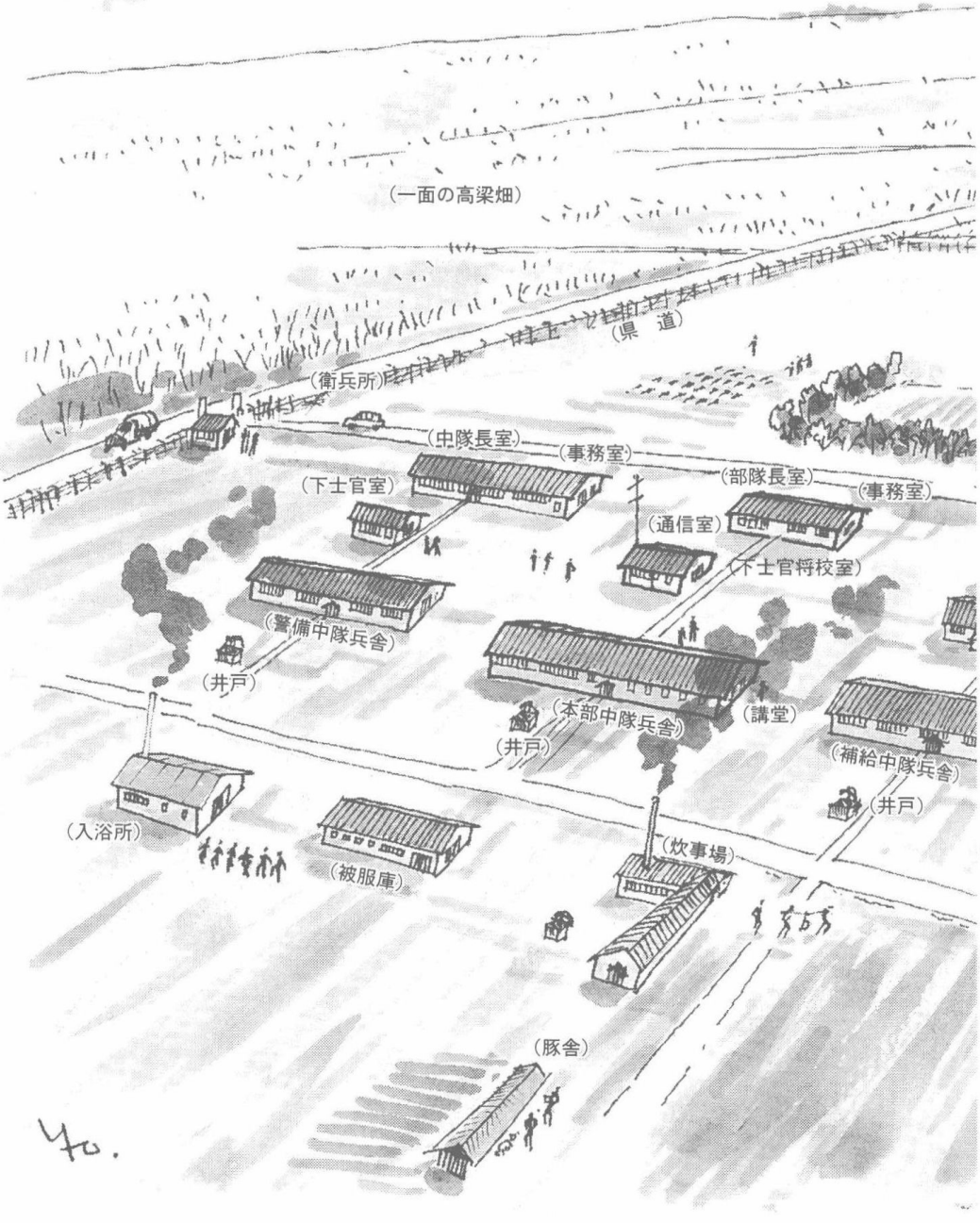
と言って、二人で再び仰向けに寝ころんだ。

清らかな初夏の月光を全身に浴びて、入隊来の緊張がときほぐされていくような快感を味わった。


（橋山・首山堡）
（満民部落）
（農　道）
（訓練場）
（糧秣庫）
（トラック）
（事務室）
（搭乗員宿舎）
（下士官将校室）
（戦隊兵舎）
（2000M滑走路）
（井戸）
（戦闘機群）
（格納庫）

遼陽第97飛行場大隊俯瞰図

川崎節郎氏（旧姓石川）回想図による



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com